

# 脳における エストロゲンの見えざる作用 —児童虐待・育児放棄の背景をたずねて—

東京大学名誉教授  
医療法人社団レニア会アルテミスウイメンズホスピタル理事長  
武谷 雄二

## はじめに

人は社会や周囲の人々との関係性を保ちつつ生活しているが、とりわけ母子の関係は最も基本的な人間関係といえる。見方を変えると、人類は種としての命脈を保ってきたということは、動物と比べ育てるのが最も大変なヒトの子を大事に育ててきたことによる。人間を特徴づけるもののなかで、子育ては最も普遍的な人性といえる。その破綻が子どもの虐待や育児放棄(ネグレクト)であるが、社会問題として各方面から現状を憂える指摘がなされている。はたして現在それが危機的状況を迎えているのだろうか。子育ては生殖の最終ステージであり、もし児童虐待が進行しているならば人類存亡の危機ともいえるものである。

人が世代を超えて存続するうえで何事にも優先されるべき子育ては、本能としてヒトの進化の過程で刷り込まれているのではないか。それが正しく発現しないということはどのような心性なのであろうか。育児行動は一連の生殖現象の延長ともいえ、その破綻には生殖関連のさまざまなホルモンによる調節系の攪乱が生じているのだろうか。今回児童虐待についての現状をながめ、このような素朴な疑問に対する解を得ようと試みた。

## 児童虐待とは

児童虐待の防止等に関する法律によると、身体的虐待、性的虐待、ネグレクト(育児放棄)、心理的虐待の4種類に分類される。子どもの前での夫婦げんかも心理的虐待となる。しかし厳密に虐待を定義、分類することは容易ではなく、その判定は時代、地域、民度などにより異なり、病気の診断基準のごとく明解かつ一義的に定めることは極めて困難である。

児童虐待は親の無知故に虐待に至る場合もあるが、その場合には親の教育指導、喚起を促すことなどで解決することが多い。しかし実際には親自身が追い込まれて、心ならずも虐待をしてしまう場合が多い。たとえば親が経済的に窮乏状態にあり、子どもに十分な栄養や適切な医療を提供できない、自身が親の愛情を受けたことがないために、どうして子を育てればよいのかわからない、あるいは日々の生活を送ることで手いっぱい、それによるストレスや心身の疲労からとても子育てどころではないということもある。このような状況下では児童虐待の根本的解決は虐待者ならびに限られた関係者のみでは無理がある。また行き過ぎたしつけ(親は子どもの将来のためになると考えている)でも、結果として子どもの心や